



カタリ



川崎ゆきお

「土日、祭日でもないのに、いない」

「はい」

老人が怪異を語るかのように語り出した。語りとはカタリとも言い、嘘を語ることもある。集うのもタカルといえば、虫がタカルようなものになる。そのため、カタリには嘘も混ざっている。その老人の語りは、その口調からカタリではないかと思われた。

「何処でですか」

「朝の道じゃ」

「何処の」

「普通の住宅地の道だ」

「そして、何がいないのですか」

「子供じゃ、小学生がな」

「はい」

「いつも私はその道を決まった時間に通る。コンビニでサンドイッチとミルクを買うのが日課になっておる。ミルク、すなわち牛乳じゃな。これは小さいのにする。残すとまずくなる。それはいい。余談じゃ」

「平日なのに登校風景がないのですね」

「そうじゃ」

「それは、学校の創立記念とか、運動会とかがあって、その振替日で、休みとか」

「水曜日じゃ。運動会なら土曜か日曜だろう」

「その謎は解けましたか」

「ああ、夏休みだった」

それで話が終われば、何も言うことはない。

しかし、聞き手は、それで失望した。語り手の老人は「すまない」と思った。カタリはここから発生する。この後だ。

その後日、また老人は妙なことを言い出した。

「登校風景を見た」

「夏休みなんですよ」

「ああ」

「じゃ、登校日かもしれませんよ」

「それだけじゃ、すまん」

「それだけじゃないと」

「服装が古い」

「はい」

「鞆を袈裟懸けにしておる。ランドセルじゃない」

「来ましたか」

「知っておるのか」

「いえいえ、その児童に思い当たるものはありませんが、少女は全員オカッパ頭じゃないですか」

」

「先に言われると辛い」

「要するに、昔のあなたが通っていたような時代の服装なんでしょ」

「辛い」

「いいです。そんなにサービスしてもらわなくても」

嘘を語る。良いように考えれば、過剰なサービス精神なのかもしれない。

了